新刊紹介

橋本二三男著
『吹き来る風に　フーミンの詩的履歴書』

なにをして来たのかと問うそよ風に
そっと差し出す詩的履歴書

このたび、文芸社のご協力により『吹き来る風に』を上梓することができました。私の高校時代からの短歌と母の短歌とで時代を追い、詩（ライトヴァース）でその背景を、エッセイでその現代的意味を問うという、拙いものですが一風変わった自伝に仕上がりました。この「人間讃歌」の何か一つでも、人々のお心に応援歌となって届くことができますれば、これに過ぎる喜びはございません。

山陰の自然を友として野生児のように戦時中を育った私は、戦後、一変した時代のなかで次第に人間関係的な割礼を受けつつ、新制度の中学校を経て農業高校で文学に目覚め、自力で文系の進路を採った。

貧窮との闘いの大学を経るころ、就職難の不況に遭い、やっと就職した私立学校でも若い教育観から校長と衝突して挫折、町工場の工員となったが、ここでも結婚直後に倒産に遭った。

苦悩のどん底にあったとき、二つの光が差し込んできた。それは長男の誕生であり、大学教授の勤めで念願の国語教師に再就職できたことであった。新生活は、急激に変容していく生徒たちとの苦闘の日々ではあったが、また感動の日々でもあった。

新任時代の旧弊（体罰・教師に対する虚礼など）との闘いをはじめとした教育改革運動。任期五年の校長時代の甲子園出場の感動や生徒の死の悲しみ。再び新任時代の担任に戻って、バイク事故や長欠問題との格闘と同時に、授業や行事を生徒たちとともに創りあげていく感動。

定年退職直後の、狭心手術の際の心臓停止からの生還、阪神淡路大震災での無念の死、生命のリレーランナーである初孫の誕生を通して、人知では測り知れない命の摂理への畏敬。

大学教職課程の授業を通して、教師を目指す青年たちが今日の現場の状況を正しく認識し、展望と快活な気迫をもって実践を重ねてくれることへの切なる願い。

これら大枠五つの半生は、生きとし生けるものの生命の尊さ、人と人との出会いの不思議さと、伸びゆくものとともにある素晴らしさとを証する歩みであった。今、その一つひとつを思い出しても、明日を生きる勇気がわく、と同時に厳粛な気持ちが込み上げてくる。

この歩みを、私の高校時代からの短歌と母の短歌とで時代を追い、詩でその背景や人間関係のエピソードに触れ、エッセイによって現在との意味を考えるという手法で綴った。この『詩的履歴書』は、中学生や高校生、教師を志す人々、そして、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんへ自ら裸になって贈る「応援歌」である。（「はじめに」より）

（文芸社　二〇〇二年五月　一七〇頁　一〇〇〇円）